

社会的知性としてのモラル・教育されるモラル

水 野 里 恵

Moral as Social Intelligence and Moral as Educated Intelligence

Rie Mizuno

モラル・ルールの発達過程を進化理論の視点から見る

社会生活を営んでいく上で、われわれは、自己の欲求や意思と他者のそれらとが葛藤する場合、内面化した行動規準に照らして自分の行動を制御している。発達心理学の概念で自己制御機能（self-regulation）と呼ばれるこの機能の獲得過程は、行動規準が子どもに獲得される過程とその行動規準に合わせて自らの行動を統制する過程との2つの過程に分けて考えられるが、前者の過程、すなわち、行動規準の獲得過程とは発達主体が依拠するモラル・ルールを形成していく過程である。Sears, Maccoby, & Levin（1957）以降、この行動規準の獲得過程に働く要因については、子どもの社会化のメカニズムに焦点を当てた研究によって、親のしつけ方略や子どもの気質などが指摘され、多くの実証データが蓄積されてきている（Gralinski & Kopp, 1993; Hoffman, 1970; 1988; Kochanska, 1991; 1993; 1995; 1997）。それらの研究は、子どもが獲得すべき行動規範は社会化のエージェント（親を仮定することが多い）が内容を決定し子どもに伝達すべきものとして捉える。ゆえに、社会化のエージェントの行動規範が子どもに内面化される過程が、子どもにモラル・ルールが獲得されていく過程と考えている。

これに対して、ヒトがどのようにモラルやルールを発達させていくのかという視点から近年ゲーム理論を応用した経済学や進化心理学の考えを取り入れた研究がなされるようになった。それらは、行動規範は、ヒトが実際に日常生活を営んでいる社会集団において進化するものであると考える。ゆえに、子どもが獲得していく行動規範は、親の行動規範をそのまま内面化するのではなく、子ども自らがその一員となっている社会集団の中で進化するものと考えられる。例えば、ポズナー（2002）の協力と規範生成のモデルとしてのシグナリング・モデルは行動規範の形成過程を以下のように説明する。社会集団の中においては、コストのかかる行動は何でもシグナル（すなわち、評判を確立し維持するメカニズム）になりうるとして、以下のような事例をあげる。『第0期において、あるクラスのほとんどの男の子と女の子が「たまたま」別の側で髪を分けており、その行動に対して道徳的な意味は全く与えられていなかったとしよう。

第1期で、規範仕掛け人的なある子どもが、自分は男の子の規範に逸脱した子を拒否するコストを負うことができるので、自分はよいタイプなのだ、ということを示す。別の人を拒否したり避けたりするのは、協力による利益を得る機会を手放すことになり、しかも報復を覚悟しなければならないので、コストがかかる行動である。悪いタイプだといわれるのを避けるために、他の人がリーダーを真似るとすれば、統計的規範から道徳的規範が発生するであろう(ポズナー, 2002, p46)^a。このように、社会学で区別されている「統計的規範(道徳とは関係のない行動パターン)」と「道徳的規範」について、シグナリング・モデルはランダムに現れた統計的規範が如何にして道徳的規範となっていくかを説明するのである。そして、子どもの社会的集団の中で、新たな行動規範が成立しそれが集団全体に広がっていくさまを描いてみせる。事実、子どもが幼稚園などに通い出すとそれまで家庭では使っていなかったような言葉を使ったり家庭では見たこともない行動をとったりするなどの例に見られるように、子どもは、親ではなく仲間集団によって社会化されると考えた方が妥当だと思われる例には事欠かない。このことについて、ピンカー(2003)は、以下のように言う。『子どもはどんな年齢層でも、さまざまな遊び仲間やなかよしグループ・趣味や利害の共通する仲間や悪さをする集団などを作り、その中で、有利な地位を得ようとする。それらはそれぞれ、外部から慣習を吸収して独自の慣習を生み出す文化である。子どもの文化は、ときには何千年にもわたって子どもから子どもへと継承される。……中略……なぜ子どもたちは親の言いなりにならないのだろうか。私(ピンカー)も、トリヴァースやハリスと同様に、それは子どもの遺伝子の利害が親の遺伝子の利害と部分的にしか重なっていないからではないかと考えている。……中略……家のルールはしばしば、きょうだいやこれから生まれるきょうだいのために、その子どもにとっては不利になっている。それに繁殖について言えば家庭には展望がない。子どもはいずれ配偶相手を競わなくてはならないし、その前に相手を見つけてひきつけておくのに必要な地位を競わなくてはならない。その競争の場は、家とは別のルールで動いている。したがって、子どもはそれをマスターしたほうがいい(ピンカー, 2003)^b。

以上のように、行動規範は子ども集団の中で進化すると考える立場の背景には、人間の行動を生物としてのヒトの行動と捉える進化理論の視点がある。この視点を、長谷川・長谷川(2000)に従って解説するならば以下ようになる。1)ヒトは生物である、という基本的事実から出発し、2)人は進化の産物である、となれば、3)ヒトは、他の生物と同様に、おもに適応的な進化の過程によって形作られてきた、ので、4)生物に共通の進化と適応の原理を考慮しなければならない。ゆえに、5)ヒトの心や行動の成り立ちを説明するためには進化理論が不可欠な基本原理になる。つまり、行動規範は子ども集団の中で進化すると考える立場は、ヒトの心の働きやヒトの社会集団の中で形成されていくモラルやルールを進化と系統発生的な視点を取り入れて考えようとするものなのである。

本稿の目的

筆者は、こうした立場、すなわち、進化理論の視点を取り入れてわれわれが獲得していくモラルやルールの獲得過程を考えることにより、子どもの社会化研究の枠組では「社会化の失敗」とされていた状況がより適切に説明がつくのではないかと考える。また、発達心理学の分野で「配慮のモラル（ギリガン，1996）」と「公正のモラル（Kohlberg, 1969; 1984）」として論争されていた問題がより明瞭な形で整理されるのではないかと考える。そこで、本稿においては、まず、進化と系統発生的な視点に基づいてモラルやルールの発達過程を考える理論や概念について概説する。そして、そうした理論や概念でモラルの発達過程を考えた場合と基本的に社会化のエージェントの行動規範を内面化するのがモラルの発達であると考えた場合の解釈の違いについて議論したい。そのうえで、「配慮のモラル」と「公正のモラル」についての議論を展開したい。

系統発生の過程で進化した社会的知性

進化と系統発生的な視点からヒトの心の働きを考える進化心理学の視点を取り入れた研究は、お互いに譲り合ったり他者の欲求や意思を自分のそれよりも優先させたりする現象や自分が何らかの損失を被っても他者の利益になるような行動をとる現象、すなわち、モラルやルールが発生してくる過程について以下のように説明する。非血縁者に対する利他行動の進化は、特定の個体間で時間をおいてやり取りされる互惠的利他行動を考えると理解しやすい。互惠的利他行動は、相互的扶助行動とは違って、行動のやり手がその時点では損失を被り、その損失が将来のある時点で埋め合わせられるという特徴を持つ。ゆえに、将来損失が埋め合わせられることを確実にするためにいくつかの条件が必要となる。それらの条件とは、特定の個体間の社会関係が長期にわたって続くこと、動物が互いに個体識別し、過去にどんな行動のやり取りがあったかを記憶できるような認知能力を持っていること、行為者が被る損失よりも行動の受け手が受ける利益の方が大きいことである（Trivers, 1971）。こうした互惠的利他行動はヒトが進化の過程で身につけてきたと考えられ、ヒトより系統発生的に前の段階にあたる他の生物にもこれに類した行動が見られることが報告されている。例えば、互惠的利他行動についてはチスイコウモリが血の貸し借りをする（Wilkinson, 1984）ことが知られているし、霊長類で見られる利他行動についての事例は多い（ドゥ・ヴァール，1998）。こうした互惠的利他行動が見られる種の社会集団では、そこで発生したモラルやルールに忠実なメンバーがいる一方で、そうしたモラルやルールを逸脱するメンバーすなわち他者から利益を受けるだけでお返しをしなかったり他者を欺き自分だけ利益を受けようとするメンバーが出てくる。なぜならば、互惠的利他行動が社会集団の中で進化するような種は脳新皮質が発達していることが知られており（社会脳仮説あるいはマキアベリの知能仮説（Byrne & Whiten, 1988））、「社会的知性」が発達すると考えられるからである。ここで、「社会的知性」は他者との社会的関係の中でいかにう

まく振舞うかに関連して必要になる知性(藤田, 2000)』と定義され、それには、競合的場面で必要になる「欺き」・「駆け引き」・「出し抜き」、協力的な場面で必要になる「思いやり」・「利他行動」・「手伝い」と「同盟」を行う知性が含まれる。例えば、社会的知性としての欺き行動や駆け引きの例としては、ヒヒの群れで観察された「戦術的な欺き」(パーン, 1998)がある。さて、欺き行動などの社会的知性の基本にあるのは、同じ社会集団に属する他の仲間の心の状態を推測する能力である。すなわち、他者が自分とは異なる視点からものごとを見るという事実が理解できる必要がある。そして、自分とは異なる視点からものごとを見ている他者が自分とは異なった信念を抱くということが推測できる能力が必要である。Premack & Woodruff (1978) が、チンパンジーなど霊長類の動物に欺き行動の例が見られ他の仲間の心の状態を推測しているかのような行動することを報告し、そこに働く心のメカニズムを「心の理論」という概念で解釈することを提唱して以来、ヒトの子どもについての社会的知性の獲得研究も精力的に行われてきている。

ヒトの子どもの社会的知性の発達

さて、ヒトの子どもはいつ頃からこうした社会的知性を獲得するようになるのだろうか。この問いについては、子どもはいつ頃から「騙すこと」ができるようになるかという研究によって回答を示すことができる。Sodian (1991) は、子どもが故意に他人に誤信をもたせるように行っている(すなわち、「騙す」)のかどうかを知るために、以下のような実験状況を作った。子どもは、自分の目の前で金貨が2つの宝箱のうちの1つに入れられるのを見る。その後で、人形(王様の人形と泥棒の人形)がやって来て、子どもにどこに金貨が隠されているかを尋ねる。ここで、子どもは、泥棒の人形が金貨を取るのを阻止し、かつ王様の人形が金貨を見つけるのを助けなければならない。こうして、子どもが1人(人形)を騙し、もう1人を助ける(正直に答える)状況が作られた。子どもを動機づけるために、泥棒は金貨を見つけたら自分が取ってしまうが、王様は金貨を見つけたらもう1枚新たな金貨を自分の宝袋から取り出して2枚とも子どもにくれるという設定になっている。2個のおもちゃの宝箱のどちらかに金貨が隠されてから、人形が場面に登場した。子どもは金貨の場所を知っているが、人形は知らない。ここで、人形が子どもに、「金貨はどこにある?」と尋ねた時の子どもの反応が観察された。子どもが泥棒には嘘を言ったり空の宝箱を指さしたりして、泥棒が金貨を取らないようにできるかどうか、そして王様には金貨の入っている宝箱を教えて、王様が金貨を見つけるのを助けられるかどうか調べられた。4歳児はこの課題に通過したが、3歳児はできず、泥棒と王様のどちらにもいつも金貨のある方を教えた。Sodian (1991) は、この課題と平行して、泥棒が金貨を取るのを阻止して王様が見つけるのを助けるために、子どもがどちらか一方の宝箱に鍵をかけなければならない課題も行った。その課題では、泥棒と王様は怠け者で、どちらも片方の宝箱しか開けないという設定になっている。そして、子どもには、どちらかの宝箱に鍵をかけて、泥棒が金貨を取らないように王様が金貨を手に入れるようにすることが求められた。3

歳児がこの課題に成功するためには、王様を助けるために空の宝箱に鍵をかけなければならない。結果は、3歳児が成功する割合は、先の課題（騙す課題）よりも多いことを明らかにした。さて、この結果は以下のように解釈できる。この課題では子どもは、自分が物理的状況を制御し他人の行動を変えることが求められている。先の課題では子どもは、情報を制御し他人の信念を変えることが求められていた。3歳児にとって難しいのは、他人の信念を変えるよう情報を制御する（騙す）ことだったのである。なぜなら、鍵をかける課題に成功する3歳児は多く、3歳児が先の課題（騙す課題）を理解しており、金貨をもらえることに興味は持っていた（が、課題に失敗した）ことが明らかだからである。子どもが「騙すこと」ができるようになることは、その子どもが他者の目的・意図・知識・信念・思考を推測できるようになったことを意味している。それは、Premack & Woodruff (1978) によれば、子どもが「心の理論」を持つようになったと言いかえることができる。この「心の理論」については、誤った信念（false belief）課題（Wimmer & Perner, 1983）と呼ばれる技法を使用して数多くの実証研究がなされており、このような一連の研究の結果をまとめたPerner (1991) によれば、「心の理論」の出現の時期がおよそ4歳頃からであると結論されている。以上、見てきたように、ヒトの子どもは幼児期後期になると社会的知性を獲得し、仲間集団の中で適応していく術を洗練させていくと考えられている。

ヒトの社会集団内におけるモラル・ルールの発達

それでは、次に、基本的な社会的知性を身につけたヒトが、自分が所属する社会集団の中でどのようにモラルやルールを発達させていくのかについて見ていきたい。他者を欺いたり出し抜いたりする知性を身につけたからといって、われわれは常に自分の欲求を他者のそれよりも優先させるわけではなく、多くの社会集団のメンバー間で協力的行動や利他的行動が進化していくことが確認されている。なぜ、われわれは自分の欲求や意思よりも集団内の他のメンバーのそれらを優先させるような行動をとるのであるのか。

われわれが日常的に参加する社会集団内では同一個体間で何度も交渉が繰り返される状況になっている。こうした状況は、反復囚人のジレンマゲームの状況となっている。コンピュータによるシミュレーション研究は、こうした状況でどのような戦略が有効であるかを解析している。そうした研究によると、TFT戦略（Tit-for-Tat, しっぺ返し戦略）が集団中に広まることができ、その結果、われわれの所属する社会集団でも協力的行動が進化する可能性が証明された（Axelrod, 1984; Axelrod & Hamilton, 1981）。ここで、TFT戦略とは、初回は必ず協力、次回からは相手方の取った戦略を自分が繰り返すというものである。すなわち、初回は協力し、その時相手方も協力なら自分も次回は協力、その時相手方が非協力なら自分も次回は非協力を選択する。ただし、相手が途中で協力を転ずれば自分も協力を転ずるというものである。このような戦略をとることによって、非協力の侵入を阻止し、互恵的利他的行動が集団内で進化する可能性が出てくる。また、Axelrod & Hamilton (1981) によれば、TFT戦略が大勢を占めている時に

は、「常に非協力」という戦略は進入できないこと、互いに繰り返し付き合う確率が高くなれば「協力と非協力を交互に繰り返す」という戦略は進入できないことが明らかになっている。つまり、お互いが繰り返し付き合う確率が高い集団内では協力行動の進化が容易であることが明らかにされている。それに加えて、われわれは、コストを払うことなく恩恵だけを受ける裏切り者を検出する心理的メカニズムを持つようになってきている（Cosmides, 1989）。ゆえに、お互いが他者を個体識別できる社会集団内では互恵的利他行動は進化しうるのであり、モラルやルールが発達していく可能性を持っている。

進化理論の視点から見たモラルの発達と子どもの社会化研究の枠組でのモラルの発達

上述してきたような進化理論を取り入れた視点から考えたモラル・ルールの発達過程に関する理論や概念は、仲間集団や学級集団といった個体識別が相互にされうる規模の社会集団でのモラルやルールの発達を考えた場合、非常に有益な見解を提供する。そして、子どもや青年の集団の中で彼らの親の世代とは異なった行動規範が発生し進化する現象をより適切に説明することができる。従来から行われてきた子どもの社会化研究の枠組では、こうした現象は、親が伝える行動規範のメッセージがうまく伝わらない現象と解釈され、その原因の究明に焦点が当てられる傾向にあった。それまでの子どもの社会化研究のレビューをした上で、Grusec & Goodnow (1994) は、行動規範が子どもに獲得されるメカニズムは、世代を超えて価値観がどのように合意されるのかという過程の分析から示唆を得られると述べている。それによると、世代間の価値観が類似したものになるか否かは2つの過程に依存するとされる。1つは、親のメッセージが正確に子どもに受け取られるかという過程である。もう1つは受け取られたメッセージが受容されるか拒否されるかという過程である。親の行動規範伝達が行われる時の状況がこれら2つの過程に影響を与える。例えば、子どもの注意が親からのメッセージに向けられていなければ、親からのメッセージの正確な受け取りはできないだろう。また、親のメッセージが正確に受け取られるためには、そのメッセージが明確で適切なものでなければならぬだろう。そして、親のメッセージが子どもに正確に受け取られたとしても、そのメッセージが受容されるかあるいは拒否されるかは親子の関係性の質に影響されるだろう。Grusec & Goodnow (1994) は、このように、子どもに行動規範が獲得される過程を、親からのメッセージの受け取り過程とそのメッセージの受容過程との2つの過程に分けて考えることが有益であると述べる。なぜならば、子どもが行動規範の獲得に失敗した理由が、子どもが正確に受け取ったメッセージを拒否したからではなく親のメッセージを聞き損なったり理解できなかったからであるならば、親のメッセージを明確なものにすることによって解決できるからである。また、ある程度力に訴える方略を使用して、子どもの注意を親のメッセージに引きつけることによって、親からのメッセージの受け取り過程に影響を与えることができる。いずれにしても、伝統的な子どもの社会化研究の枠組では、親の行動規範が子どもに伝達されそれが子どもの行動規範として内面化されるという前提に立つので、親の世代と異なった行動規範が子どもに獲

得された場合、それは行動規範の内面化過程で何らかの問題が発生したと考えられるのである。しかしながら、現実には、子どもは親が価値を置くものを正しく認識しているがそれに自分自身は価値を置かないという理由で、それを自らの行動規範とすることを拒否するということはよく見られる。そして、そうした事態が自分と同世代の社会集団の中で広まった行動規範に影響されて引き起こされているという事例にも事欠かない。こうした事態は、子どもの社会化に親の世代が失敗したせいではなく、社会的知性を獲得した子どもが自分の所属する社会集団の中で独自のモラルやルールを発達させていく必然的な結果として起きると考えた方がより適切であろう。

社会的知性としてのモラル：配慮のモラル

さて、進化理論を取り入れた視点から考えたモラル・ルールの発達過程に関する理論や概念は、「配慮のモラル」がヒトという種に備わったモラルと考えられることを示唆する。ここで、「配慮のモラル」とはギリガン（1996）の概念を指すが、ギリガン（1996）は女性のアイデンティティの形成過程に組み込まれたものとして配慮のモラルを考えた。配慮のモラルは結びつきのネットワークの中で考えられるものであること、コミュニケーションを通して他者が何を欲しているのかを知ったのであればそこから他者が求めていることに対して責任が生じると考えるのが配慮のモラルであることを考慮すると、個体識別が可能な社会集団の中で行われるコミュニケーションを通して他者の欲求に応えるべきであるとの配慮のモラルが進化する余地がある。そこでは、ギリガン（1996）が言うように配慮のモラルの発達を敢えて性アイデンティティ形成過程に結びつけなくとも、コミュニケーションを通してお互いを認識できるメンバー間では互いの欲求を知り、それに配慮し、求められた場合にはその欲求に応える責任を負うようなモラルがヒトの社会集団の中で進化する可能性が生まれてくる。事実、道徳性の性差に関連してなされた研究をレビューしメタ分析を行ったJafee & Hyde（2000）によれば、配慮のモラルには有意な性差は認められないことが報告されている。こうしたことから、実証研究によってさらなる検討が必要であることは認めるが、理論的には、配慮のモラルは、女性が自らの性アイデンティティを形成していく過程で発達させていくモラルではなく、社会的知性を獲得したヒトが社会集団を形成して生活を営む過程で自然に発達させていくモラルであると考えられる。

以上のように、配慮のモラルは、社会的知性の一つとして、個体識別可能なヒトの社会集団の中で進化する可能性が示唆された。一方、「公正のモラル」の発達には、これと同様の理論では説明できない。以下に、そのあたりの事情について説明していく。

教育されるモラル：公正のモラル

現代社会に生きるわれわれは、もはや個体識別可能な規模の社会集団内だけでは生活できなくなっている。すなわち、われわれは、仲間集団や学級集団といったお互いが個体識別可能な

社会集団に所属する一方で、民族や国家といった匿名性が保証される社会集団にも所属するという現状に生きている。集団のメンバー間で匿名性が保証されるこうした状況は社会的ジレンマ状況（メンバーの戦略が皆「裏切り」であれば、個人の得点は上がるが、社会全体としては損失になるという状況）と呼ばれ、簡単には協力的行動が出てこない。また、ヒトは、進化の過程で社会的知性を身につけてきたがそれはせいぜい150人程度の集団生活に必要な社会的知性であった。現在の複雑化した社会では幾世代も先の人々をも含んだ非常に大きな社会集団を維持すると同時にその集団内で適応していくのに必要な知性が求められている。高度に文明化し複雑な社会制度に囲まれた現代に生きるわれわれは、ヒトが進化した当時の環境とは非常に異なった状況に置かれているのである。こうした不特定多数の匿名性が保たれたままの他者と日常的に接触しなければならない社会集団の中では、どのようにモラル・ルールは進化していくのであろうか。

筆者は、匿名性が保証される不特定多数のメンバーからなる社会集団の中で利他的行動が進化するためにはモラル・ルールに対する教育が不可欠だと考える。とりわけ、その社会集団のすべての人がすべての他者の観点から何が公正かを考えるという意味での公正のモラルを集団のメンバーが獲得するようになるには、ヒトが進化の過程で獲得しえた社会的知性だけでは対処しきれないだろう。なぜならば、ヒトが進化した当時よりはるかに複雑かつ大規模な社会集団に属するわれわれには、個体識別不可能な他者の視点を取るような知性が求められているからである。しかし、人間は、不特定多数のメンバーからなる大規模な社会集団内で利他的行動や協力的行動を維持させていくのに必要な心の仕組みを進化を通して獲得してはいない。これは、ピンカー（2003）がギアリー（デイヴィット・ギアリー）を引用しながら数学教育に関して指摘していることに類推して考えることができる。数学教育に関するピンカー（2003）の指摘の要旨は以下になる。子どもたちは、自然淘汰によって基本的な数学力、すなわち、小規模な数量の判断、「以上」・「以下」などの関係や小さい数の序列の理解、小さい数の足し算と引き算、数字を使った数の勘定や軽量や計算、を与えられている。しかし、備わっているのはそこまでである。ギアリーによれば、子どもたちは、大きな数字、十進法、分数、多列の足し算や引き算、繰上げ、繰り下げ、掛け算、割り算、ルート、べき指数などを操るようには、生物学的にデザインされていない。こうした技能はゆっくりと不均等に発達するかもしれないし、まったく発達しないかもしれない。学校数学の内容は歴史的に見て新しく、また少数の文化でのみ考案されたものであるから、ヒトゲノムに刻印されるには新しすぎるし局所的過ぎる。これらの発明は、最古の農耕文明において、余剰農産物の記録や取引から生まれた。そして正規の教育や文字のおかげで、何千年にも渡って累積され、簡単な運用が次第に複雑な形になっていった。こうした経緯を考えると、人がどのようにして石器時代の頭脳で高度な数学を駆使できるのかを考えなければならない。一つは心のモジュールをそれが対象とするようにデザインされたのではない対象に向ける方法によって可能になると考えられる。例えば、数に関わる能力は、多量の物を分析するのに用いられていたのだが、一山の石に含まれる石の数という限定

的な概念から量という一般的概念を抜き出すためには、数の感覚を、最初は不適切と感じられる対象に適用しなくてはならない。数学の能力に至るもう一つの道は訓練である。数学の概念は、もともとある概念を組み合わせて新たに有益な構成をるところからくる。しかし、そのもともとある概念は、より古い概念から組み立てられている。多数の訓練とともに、概念がまとまって大きな概念になり、一連のステップがまとまって単一のステップになる。レシピにソースの作り方は書いてあってもスプーンの持ち方やビンのあけ方までは書いてないように、数学は、過剰学習された慣例的な手順を組み合わせて学習されるものであり、情け容赦のない積み重ねで数を10まで数えたころまでさかのぼる。すなわち、数学に必要なさまざまな技能は文明が後で取り付けた付属品であるので、進化的に人間に備わった特性すなわち工場で組み込まれた装置ではない。生得的な心のモジュールを、それが扱うようにデザインされていない題材を扱うように設定するのは難しい。ゆえに、数学の概念を子どもが習得していくためには、子どもに自ら数学の知識を構成させるような方法(構成主義による数学教育)では対処できない。数学教育には、知る方法のつながりをはっきり示す良いカリキュラムと、もたもた時間のかかる一連のステップをかたまりにまとめ反射のようにしてしまう練習が必要なのである。以上のように、ピンカー(2003)は、数学教育に携わる者は、進化心理学の知見からわれわれが進化してきた環境の中で心が何をするようにデザインされたのかを理解し、適切な対策を立てる必要を説いている。同じ趣旨のことが公正のモラルに対する教育についても言えるというのが筆者の見解である。なぜならば、公正のモラルは、具体的現実的な自己の置かれた立場を一旦離れ、より客観的抽象的観点で社会集団内のあらゆるメンバーと「理想的発話状況」のもとでディスクルス(ハーバマス, 1983)を行う能力を必要とするからである。この能力は、数学と同様の客観的抽象的概念を操作する知識や技能から構成されており、進化的に人間に備わった心の仕組みではないからである。

上述してきたように、進化理論の視点を取り入れてモラルの発達について考えた場合、配慮のモラルに関しては子どもが遊び仲間という社会集団に参入しそこで適応していく過程でヒトという種に組み込まれた心の仕組みを使用することによって獲得可能だが、公正のモラルに関しては、それを獲得するのに必要な概念や技能を教育と訓練によって身につけていかなければならないと筆者は考える。

さて、公正のモラルは、「自由」・「生命」など人間としての普遍的な権利を保障する契約・合意・法律によって社会組織は成立すべきであると考え。その際に、そうした契約・合意・法律は、すべての人間を手段としてではなく目的として扱い(その人格を尊重し)理想的役割取得によって決定されるべきものとする。そして、こうした観点から現存の契約・合意・法律さらには社会組織の是非を批判的に検討する。そこで、公正のモラルの獲得には、「自由」・「公共の福祉」・「生命」・「平等」・「権利」・「義務」・「責任」などの概念の理解が必要とされ、そうした概念を現実の紛争解決や社会的合意の形成過程に自由に駆使できる思考方法が技能として必要となる。これらの概念を理解するだけの見識やこれらの概念を

紛争解決や社会的合意形成過程に駆使できる技能は、ヒトという種に生物学的にデザインされたものではなく、ヒトが社会集団から社会制度を発達させ社会制度の多様性や複雑性が増大していくのと平行して洗練させてきた概念や技能だという経緯を持っている。ゆえに、こうした概念や技能を獲得するには、数学教育に関してピンカー（2003）が指摘したと同様な教育と訓練を必要とする。

ここで、公正のモラルについての教育ということに関して現状に目を向けてみる。アメリカ合衆国では1964年にCenter for Civic Educationがカリフォルニア大学ロサンゼルス校と共同で公民教育の学際的研究を始め、1969年には初等教育から中等教育段階までの一貫する教育カリキュラムを発表している。このカリキュラムは、公正のモラルを獲得するのに必要かつ基本的な概念である「権威」・「プライバシー」・「責任」・「正義」について概念的アプローチを展開しており、子どもたちがこれらについてどのように考えるべきか、どのように分析し、生活の中でどのように効果的に解決すべきなのかを活動を通して身につけられるように考えられている（公民教育センター，2001）。ただし、これは、厳密には法教育カリキュラムであり、公正のモラルの教育カリキュラムではないので、社会組織の是非を批判的に検討する能力まで射程に入れているわけではない。だが、社会組織の是非を検討する能力の前提となる基礎的な概念や技能を修得するための教材が豊富に用意されていること、市民としての責任と権利を理解することが公正のモラルの基本であることを考えると、これを参考に公正のモラルの教育カリキュラムを作成することが有益であろう。わが国でも、裁判員制度の導入が現実のものになるに従って、裁判員になるための意義や知識を教育する必要性は高まっていくであろう。裁判員に求められるのは、まさに「自由」・「公共の福祉」・「生命」・「平等」・「権利」・「義務」・「責任」などの概念を現実の紛争解決に自由に駆使できる技能である。これらの概念や技能を修得するための教育カリキュラムの作成が求められている。

文献

- Axelrod, R. (1984) *The evolution of cooperation*. Basic Books: New York.
- Axelrod, R. & Hamilton, W. D. (1981) The evolution of cooperation. *Science*, 211, 1390-1396.
- Byrne, R. W. (1995) *The thinking ape: Evolutionary origins of intelligence*. Oxford University Press: Oxford. 邦訳：バーン（1998）小山高正（訳）「考えるサル」大月書店。
- Byrne, R. W. & Whiten, A. (1988) *Machiavellian intelligence*. Clarendon Press: Oxford.
- Wilkinson, G. S. (1984) Reciprocal food sharing in the vampire bat. *Nature*, 308, 181-184.
- Center for Civic Education (1997) *Foundations of democracy: Authority, privacy, responsibility, and justice*, Upper elementary student book. Center for Civic Education: Calamasas, CA. 邦訳：公民教育センター（2001）江口勇治（監訳）「テキストブック わたしたちと法：権威，プライバシー，責任，そして正義」現代人文社。
- Cosmides, L. (1989) The logic of social exchange: Has natural selection shaped how humans reason? *Cognition*, 31, 187-276.
- de Waal, F. B. N. (1982) *Chimpanzee politics: Power and sex among apes*. Harper and Row: New York. 邦訳：ドゥ・ヴァール（1994）西田利貞（訳）「政治をするサル」平凡社。

- de Waal, F. B. N. (1996) *Good Natured: The origin of right and wrong in humans and other animals*. Harvard University Press: Cambridge, MA. 邦訳：ドゥ・ヴァール（1998）西田利貞・藤井留美（訳）「利己的なサル・他人を思いやるサル」草思社
- Dugatkin, L. A. (1997) *Cooperation among Animals: An evolutionary Perspectives*. Oxford University Press: Oxford.
- 藤田和生 子供と動物は正直というけれど：社会的知性の進化と発達 桐谷滋（編著）心の発達，ことばの発達：子どもはなにをどのように学ぶのか 2002（第16回）「大学と科学」公開シンポジウム講演収録集 22-33 .
- Gilligan, C. (1982) *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Harvard University Press: Cambridge. 邦訳：キャロル・ギリガン（1996）岩男寿美子（監訳）「もうひとつの声：男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ」川島書店 .
- Gralinski, J. H., & Kopp, C. B. (1993). *Everyday rules for behavior: Mothers' requests to young children*. *Developmental Psychology*, 29 (3), 573-584.
- Grusec, J. E., & Goodnow, J. J. (1994). *Impact of parental discipline methods on the child's internalization of values: A reconceptualization of current points of view*. *Developmental Psychology*, 30 (1), 4-19.
- Habermas, J. (1983). *Moralbewusstsein und kommunikatives handeln*. Frankfurt: Suhrkamp. 邦訳：ハーバマス(1991). 三島憲一・中野敏男・木前利秋（訳）「道徳意識とコミュニケーション行為」岩波書店 .
- 長谷川寿一・長谷川真理子（2000）進化と人間行動 東京大学出版会 .
- Hoffman, M. L. (1970). *Conscience, personality, and socialization techniques*. *Human Development*, 13, 90-126.
- Hoffman, M. L. (1988). *Moral development*. In M. H. Bornstein & M. E. Lamb (Eds.), *Developmental psychology: An advanced textbook Second edition* (pp. 497-548). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associate.
- Jaffee, S. & Hyde, J. S. (2000) *Gender differences in moral orientation: A meta-analysis*. *Psychological bulletin*, 126, 5, 703-726.
- Krebs, J. R. & Davies, N. B. (1993) *An introduction to behavioral ecology*. third edition. Backwell; Oxford.
- Kochanska, G. (1991). *Socialization and temperament in the development of guilt and conscience*. *Child Development*, 62 (6), 1379-1392.
- Kochanska, G. (1993). *Toward a synthesis of parental socialization and child temperament in early development of conscience*. *Child Development*, 64 (2), 325-347.
- Kochanska, G. (1995). *Children's temperament, mother's discipline, and security of attachment: Multiple pathways to emerging internalization*. *Child Development*, 66 (3), 597-615.
- Kochanska, G. (1997). *Multiple pathways to conscience for children with different temperaments: From toddlerhood to age 5*. *Developmental Psychology*, 33 (2), 228-240.
- Kohlberg, L. (1969). *Stage and sequence: The cognitive developmental approach to socialization*. In D. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research* (pp. 347-480). Rand McNally: Chicago.
- Kohlberg, L. (1984). *Essays on moral development: The psychology of moral development*. Harper and Row: San Francisco.
- Pinker, S. (1997) *How the mind works*. W W Norton & Co. 邦訳：ピンカー（2003）椋田直子（訳）「心の仕組み（上）」・椋田直子・山下篤子（訳）「心の仕組み（中）」・山下篤子（訳）「心の仕組み（下）」NHKブックス .
- Posner, E. A. (2000) *The law and social norms*. Harvard University Press. 邦訳：エリック・ボズナー（2002）大田勝造（監訳）「法と社会規範 制度と文化の経済分析」木鐸社 .

- Perner, J. (1991) Understanding the representational mind. The MIT Press: Cambridge, MA.
- Premack, D. & Woodruff, G. (1978) Does the chimpanzee have a theory of mind? *The behavioral and brain sciences*, 1, 515-526.
- Sears, R. R., Maccoby, E. E., & Levin, H. (1957). *Patterns of child rearing*. Evanston, Illinois: Row, Peterson and Company.
- Sodian, B. (1991) The development of deception in young children. *British journal of developmental psychology*, 9, 173-188.
- Trivers, R. L. (1971) The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review Biology*, 46, 35-57.
- Wilkinson, G. S. (1984) Reciprocal food sharing in the vampire bat. *Nature*, 308, 181-184.
- Wimmer, H. & Perner, J. (1983) Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding deception. *Cognition*, 13, 103-128.

〒483 - 8086 愛知県江南市
高屋町大松原172番地
愛知江南短期大学
現代幼児学科